

雨は昨日の夜から降り始めた。小学生の息子は朝早く起きて、窓から外を見ていた。

「お母さん、今日、クリスマスイブなの知ってる?」

私は知らなかったと答える。

「愛ちゃん千でパーティーなの覚えてる?」

「ごめん。忘れてた」

私は持っていくプレゼントはどうしようと考え。ふと気づくと、息子は、私の顔を覗き込んでいる。

「愛ちゃんのお母さんが何にも持って来なくてもいいって言ってたよ」

息子は楽しそうに雨の中へ飛び出していく。

私はレインコートを着る。自転車に乗る。ミンからパーティの職場までは数分で着く。

ロッカー室に入る。リタがいる。リタは寒いね

えと、眠そうに言う。リタはタバコに火をつける。

私は部屋を出で、タイムカードを押す。パートで働いている人は、出社時間も退社時間もバラバラ。

私が一番早い。

ローラーで服のごみを取る。手を消毒する。部屋に入る。サムがいる。リタとサムは夫婦。私はサムにおはようと言う。サムは黙って頷くだけ。

サムは朝はいつも機嫌が悪い。部屋の中は冷え切っている。そのうち、嫌になるほど暑くなる。机にアルコールをスプレーする。タオルで拭く。ダニーが入ってくる。おはようと言うと、元気いとからないう音楽を大きな音で聴いている。

リタ、サム、ダニー、三人とも肌の色が黒い。

話す言葉は英語とは思えない。一つも知ってる単語が出てこない。

最初に来た時、社長さんに会った。日本人ではないのに驚いた。白人。どこの国の人だろう。なんとなく、アメリカ人ではない気がした。骨格が太くなく、なよっとしている。朝礼がある時は、おはようございます。今日も頑張りましょう。と、ちよっとだけおかしいイントネーションで言う。

リタは奥の部屋で大きなボールにケーキの材料を入れ、こね始める。それが終わると、それをケーキの型に流し込む機械に運ぶ。ダニーが大きなボールを持ち上げ、機械に流し込む。機械の下にケーキの型を並べ、ダニーは、それをめがけて、機械の細い口からケーキの材料を流し込む。時々、分量を間違えたのか、型から材料があふれ出す。

私は材料の入った型を積み重ねる。サムがそれをオーブンに入れる。私は、ケーキが焼きあがっ

てオーブンに次のが入れられるまで、ダニーが入れ続けている型を積み重ねて並べる。ベルトコンベアーになった気分。

焼きあがったケーキは冷房の入った部屋へ運ぶ。サムは運ぶ前に何個か取って机の下に置く。冷めた頃、そばに誰もいない時、それを取り出して食べる。私にも持ってくる。私は、慌てて食べる。

サムが大きな声で歌を歌いだす。天井を見上げる。誰かに向かって大きな声で話しかける。少し、芝居がかっている。奥の部屋で、リタがそれに答えるように叫ぶのが聞こえる。いつも喧嘩ばかりのサムとリタ。リタはそのうちサムの歌に文句を言うだろうと思っていた。リタがサムと一緒に大声で祈りの声を上げたのは少し驚いた。

サムは歌い飽きたのか歌うのを止める。でも、

時々、ぶつぶつと呪文を呟く。ボイラーの熱のせいかぼんやりしている。かいた汗を拭く。思い出したように、独り言のように、メロディの断片を口ずさむ。私はサムを見ない。サムがメロディを口ずさむ。ふいに、私は泣きたくなる。

昼休みが終って部屋に戻る。一番年長者で、私も何回か怒られた人が近づいてくる。

「社長さんたちがケーキを買ってくれたから、帰る時、食べてちょうだい。休憩室にあるから」

また小言かと思ったので安心する。

「タイムカードを押してからよ。食べてからタイムカード押しちゃだめよ」

そう言って私を睨んだ。

仕事が終わる。タイムカードを押す。着替える。

休憩室に入る。ケーキが何種類か置いてある。どこからか買ってきたケーキ。小さなサンタのデコ

レーション。ドアが開く。入って来たのは、この会社に同じ時期に入った人だった。彼女は置いてあったナイフでケーキを切る。

「切ってあげようか？ どれにする？」

私は彼女と同じのでいいと答える。彼女はケーキをほおばりながら、もうひときれ切る。それを置いてあったアルミ箔に包む。私にこれでいいかと指差す。私は頷く。彼女はケーキを切ってくれて、アルミ箔に包んでくれる。

同じ時期に入った人達はほとんど辞めてしまった。この前、辞めてしまった一人がシュークリームを持ってやってきた。今度、勤めた会社のだという。

彼女が辞めたのは、ロッカーに置き忘れた財布からお金がなくなっていたからだ。そのあと、彼女はわざと財布をロッカーに置いておいた。休みは交代でとる。何回かの罍のあと、犯人だと思わ

れる人が特定できた。そして、二人は辞めていった。

シュークリームは美味しかった。彼女は子供を連れて来たから会わないかと言った。子供はまだ小さくて、自転車に付けられた子供用の椅子で寝ていた。

外に出る。雨は降り続けている。空を見上げる。サムが歌っていたメロディが耳にこびりついていく。自転車に乗る。サムの歌を口ずさんでみる。歌なんて久しぶりだと気づく。